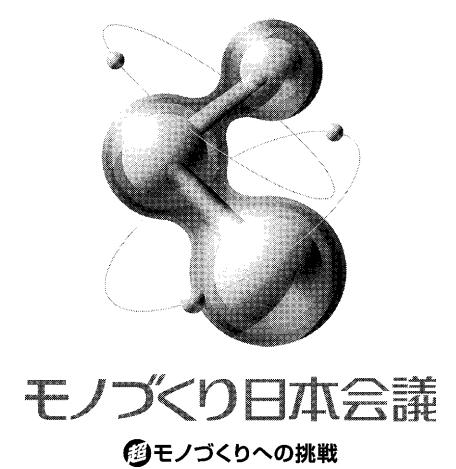


ロボット研究会

ロボットベンチャーとエコシステムの理想の形を考える

モノづくり日本会議は6月22日、東京・大手町のトラベル・ハブ・ミックスでロボット研究会を開いた。資金調達手法の多様化や試作の容易化で事業環境が大きく変化するロボットベンチャーとその支援企業各3社が登場し、ロボットベンチャーを巡る状況やその支援施策のあり方などについて議論した。

あいさつ
ロボット研究会コーディネーター 千葉工業大学未来ロボット技術研究センター副所長 石黒 周氏
「ロボティクスを成功させるためには、ベンチャーによるチャレンジが多く生み出されるようにしなければなりません。ロボットの技術の導入することで課題解決を図り、顧客・新しいビジネスに結び付けて経済価値を創出する「ロボ」らしい。」



ロボットベンチャーによるプレゼンテーション

ispac
取締役兼COO 中村 貴裕氏

私たちは人類の生活圏を地球から宇宙に広げること、人類の生活を豊かにすること、月を水と酸素を供給すること、ロケットや衛星、着陸船の燃料にすることができ、私たちはこれを活用すること、月をガスステーションとして利用し、宇宙の輸送体系を大きく変えたいと考えている。



宇宙開発には膨大な資金がかかるため、ベンチャーキャピタルなどによる実

宇宙開発をコンテンツに

質的に最初の資金調達ラウンドであるシリーズAで103.5億円を調達した。この資金を元に、2020年に、月の周回軌道に1月にモノを運ぶ②ローバ―で収集した月のデータを政府系の機関に販売する③宇宙開発の取り組みをコンテンツとし、出資企業のマーケティングやブランドに活用してもらう④顧客は政府系の機関や民間のインフラ企業、メディア・エンタメ系の企業など幅広い。JAXAとは5年間の共同事業を実施している。



ispacが目指す月面探索のイメージ

ユカイ工学 CEO 青木 俊介氏

当社は25年に至る家庭用品の設計開発やデザインにコミュニケーションロボットがある未来を創ること、開発を生かしている。目指し、人が楽しく・愉快地になるロボットを開発している。売上げの6割がセラーロボット「Qoo」受託で4割が自社製品の販売だ。さまざまな企業の製品に1回社内で行っている試作コンペで生まれたプロダクトで、なで方によってリアクションが変化するため「コミュニケーション」を取っているように感じる。製品発表表直後の昨年10月、

楽しく・愉快的ロボ開発



3年前にはコミュニケーションロボット「ボッコ」を発売した。人がボッコの前を通ると通知する人感センサーや部屋の温度や湿度を通知する温度・湿度センサーなどを搭載し、高齢者や子どもが見守りや使われるケースが増えている。今後、センサーのバリエーションやウェブサービスとの連携を進めることでプラットフォームに進化させたい。

Moff CEO 高萩 昭範氏

当社のビジョンは「子どもからお年寄りまで生き生きとした健康的な生活を送ることに貢献すること」だ。手に付けて動きをセンサーで測定する「モフバンド」を核に、さまざまなサービスを提供している。当



これまでの経験を踏まえ、ロボット事業には次の五つの考

独自のハードウェア 強みに



運動データを測定するウェアラブルデバイス「モフバンド」

え方をもっている。①ハードウェアはシンプルにして、②独自のハードウェアから得られるデータが最大の差別化とスケール要素になる③データはユーザーによって提供される④自由なアプリケーション。ベンチャーがハードウェアを開発することはリスクが高いと思われがちだが、他社にないデータを収集できること、欲しいデータを収集するためにハードウェアを更新できるなど、差別化を図りやすい。

スタートアップ支援者によるプレゼンテーション

Darma Tech Labs CEO 牧野 成将氏

近年、ハードウェアベンチャーが増えている。その理由に、デジタルファブリケーションが普及したことでモノづくりが安価に始められるようになったことや、CFの台頭で資金調達しやすくなったこと、IoT（モノのインターネット）の出現でソフト・ハード



「死の谷」越えを支援

課題解決・交流の場に



有坂 庄一氏

Spervo CEO 高橋 ひかり氏

社名のSPERO（スベロ）はラテン語で希望を抱くという意味だ。全ての人の一瞬のひらめき・アイデアを希望と捉え、それを形にすることを目指している。具体的な支援として、製造支援、ユーザーエクスペリエンス（UX）支援、シード資金支援などに取り組んでいる。製造支援事業は製造エンジニアのマッチングサービスパートのマッチングサービス

事業化へ総合サービス
高橋 ひかり氏は、製造支援事業は製造エンジニアのマッチングサービス

パネルディスカッション

■パネリスト
ispac 中村 貴裕氏
ユカイ工学 青木 俊介氏
Moff 高萩 昭範氏
Darma Tech Labs 牧野 成将氏
Tekkushoppo 有坂 庄一氏
Spervo 高橋 ひかり氏



ロボットベンチャーの課題と資金調達

人材・顧客紹介などVCに期待／製品開発はサービスありきで

は全然売れなくても面白い製品はある。開発者も「売れる製品を開発する」「企業を成長させる」とは違う価値観を持っている人もいて、どう支援すべきかを考えている。牧野 製品の良しあしの評価は投資先の顧客がするものであるため、VCは評価に迷うことがある。VCは投資先を信じるのが重要だと思

高橋 製品開発する上で、技術やサプライヤーの探索はどのように行なったか。中村 サプライヤーの探索には苦労した。設立当初はさまざまな企業に手紙を100通くらい書いて送った。製品開発はサービスありきだと考えている。顧客の課題がどこにあるのか考え、それを解決する製品開発を行ってきた。青木 インフォーションの起点はデバイスだと思つた。半導体部や部品メーカーから新しいデバイスの情報をもらうことで技術探索を行っていた。

高萩 データを集めるために試作品をひたすらプレゼンして協力してくれる人を集めた。高橋 事業化前にデータを集めるにはどうすれば良いか。中村 データを集めるために試作品をひたすらプレゼンして協力してくれる人を集めた。高橋 事業化前にデータを集めるにはどうすれば良いか。中村 データを集めるために試作品をひたすらプレゼンして協力してくれる人を集めた。

高橋 他プレイヤーへの要望は。有坂 ベンチャーの中にはロボットに愛着が湧き過ぎ、作ることが目的になる場合がある。事業のコアやバリューを考え、サービスを提供してほしい。

高萩 大企業では技術的、文化的にできないことがベンチャーならできることがある。新規事業の立ち上げなど、貢献できることは多い。

「モノづくり日本会議」は、2007年9月に設立した「モノづくり推進会議」での活動を土台に、広域企業ネットワークや他機関との連携を活用し、日本のモノづくり産業の強化に役立つ実践的な勉強会・シンポジウムなどのイベントや交流会などの活動を展開しており、日刊工業新聞社が事務局を務めている団体です。

少子高齢化、環境対応、資源・エネルギー問題など様々な課題を乗り越え、「超」モノづくりの推進をテーマに、事業を進めております。これまでの取り組みを発展・拡充させるとともに、IoTやAIを含めたロボット産業や「防災イノベーション」など、横断的なテーマについては、より実践的な成果を目指します。

先進的な技術やノウハウを有する会員企業をはじめ、多彩な連携機関のご協力をいただき、モノづくり産業のさらなる発展を目指して事業を展開し、モノづくり産業の競争力強化につながるよう、地域間、企業間連携をおこない、ビジネスマッチングなども図っていきます。

「グローバル競争力強化関連事業」

- モノづくり力徹底強化検討会
- 価値創造型サプライチェーン検討会
- 人材育成関連事業
- 長寿企業イノベーション勉強会

「新産業・ビジネス創出／ビジネスモデル構想力向上検討事業」

- ネイチャー・テクノロジー研究会
- ロボット研究会
- 新産業創出検討会
- ロボットビジネス 2020
- 新産業技術促進検討会
- 農商工連携勉強会

その他の事業コンテンツ

- 交流会・マッチング事業
- 顕彰事業
- モノづくり部品大賞
- 地区別研究会
- 中部地区研究会

■モノづくり推進シンポジウム

- 特別講演会
- 防災イノベーション

モノづくり日本会議の事業

各事業の詳細は、モノづくり日本会議ホームページ (www.chomonozukuri.jp) をご覧ください。

●お問い合わせ先● モノづくり日本会議事務局 〒103-8548 東京都中央区日本橋小網町14-1(日刊工業新聞社内) Tel: 03-5644-7608 Fax: 03-5644-7209